
中華娘にご用心

碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中華娘にご用心

【Nコード】

N2847U

【作者名】

碧

【あらすじ】

民の平和を守る正義のヒーロー（ただし短気）と、何故か偶然それを毎度毎度邪魔する中華娘（逃走癖有り）。彼らのおかげで、都は今日も平和です。

《超短編。続くかも？》

(前書き)

猫「cat」

ですが、この話ではKというイニシャルとLとTとDとKとLとDとLと

(笑)

申し訳ございませんOTL

「…合図は、まだか」

「慌てるな、K。まだ予定の時刻に至っていないデシヨ。それに、明かりが消えてからそれほど時間がたっていない。奴らが寝静まるのはもう少し後だ」

苛立つ年下の上司に対し、ゆらりとタバコを吹かす男はニヤリと笑んだ。対して諫められた張本人はチツと小さく舌打ちをする。ほんのかすかな音だったはずなのに、バツチリ聞かれていたようで、クツクツと隣で起こる笑いにキャット・ウォールズはまたもや額に青筋を浮かべた。

時刻はもう真夜中になろうという頃。

日はすっかり落ちてしまい、煌々と街を照らしひとたびにぎわいを見せていた光も遙か遠くに消え去った。いまや目の前に広がるのは無数の木々と、その中にひっそりとそびえる粗末な掘っ立て小屋ひとつのみだ。こんな時間、こんな場所に、当たり前だが人気は全くなく、時おり思い出したように鳥が目の前を通りすぎるが、こちらも暗くてはそれさえ目視するのは難しい。

Kはもう一度、舌打ちをする。相手に聞こえていようがまいが隣でクツクツ笑いが激しさを増して腹をかかえぶるぶると本格的に震えを押さえていようがどうでもよかった。どうでもよかったが自分の拳は脳の命令に反してディックの脳天に振り落とされた。本能って恐ろしい。ただしその後、たまらずに吹き出したディックの鳩尾に叩きこまれた蹴りは、間違いなく自分の脳から発信された命令によるものだったが。

「…それにしても、遅いねえ。先発隊の奴ら、俺らの存在を忘れてぐーすか寝こけてんじゃねえの？」

憂いを含んだ声と共に、ディックはふうっ、と白い煙を吐き出す。張り込み・突入・交渉、どんな時でもたばこを手放さない超ニコチン中毒者に、Kはイライラしながら言った。

「そんな事実があってみろ。明日の訓練は通常の2倍に加え、1ヶ月間の馬小屋番を与えてやる」

「げ、Kつてば超えぐい。…じゃあ、その寝こけてる理由が、不可抗力によるものだったらどうする？」

「何の話を…」

コトリ、と何かが倒れる音がしてKは身を強張らせた。そこで初めて、Kはディックの笑みの正体を知った。

ずっとディックが手にもった小さな明かりが遠く前方を照らす。先ほどは闇にまぎれて分からなかったが、今は明かりのおかげで無残に転がった先発隊の一人の姿が確認できた。見張り対象に気づかれないようゆっくり近づくが、大きな雑草の集合体かと思っていたそれは、いつまでたっても起きる気配はない。恐らく、額にできた大きな痣のせいだろう。拳より一回り大きな一撃を、暗闇からもろにくらってしまったようだった。

Kはしばらく失神した部下の傷跡を眺めていたが、ハツと気づいた。まさか、と脳がフル回転し始める前に、見張っていた掘っ立て小屋からガタツと大きな物音が起こる。

「…こんツツツの悪党どもがああああ！！いたいけな娘たちにあんたたちみたいな薄汚い野郎が手を触れるなんておこがましいにもほどがあんのよおおお！！！！」

その瞬間、ドゴオツと一際大きな音が響き渡り、同時に何かが崩れ落ちる音がする。パツと明かりがつかくと複数の男たちの怒号が起こった。喧騒を背に真っ青な顔をして扉から転がり出てきたのは、救出対象に指定されていた少女たちだ。

Kは茫然と窓の向こう側で繰り広げられる人と物の行き交いを見ていた。ポン、と肩にのせられた手に正気を取り戻す。すがりついてくる少女たちをなだめつつ、今日一番嬉しそうな笑顔を浮かべたディックは、Kにとって不吉で不吉で仕方がない言葉を、躊躇いなく吐き出した。

「あのお嬢さん、またいるみたいだね」

パツと弾かれたように草陰から飛び出したKは、他の後発隊の驚きの視線を無視し、急遽突入を開始。ドガツバキツと何かを殴り殴られそして陶器の破裂音が耳をつんざく。そんな様子をディックがニヤニヤ見守ることおよそ数分。再び戸口に現われたKの右手には、ギヤーギヤー騒ぐ一人の少女の姿があった。

「　　ツツの、馬鹿娘!! 何度言ったら分かるんだお前は!」

「　　るっさいわね! 黙りなさいよ、今何時か分かってんの!? 夜よ夜、しかも真夜中! 市民の方々の安眠を守るはずである貴方が、その規律をぶち壊していいとも思ってたのかしら、ハッ、偉くなつたものよねえ猫の分際で」

「猫じゃねえ、俺はKだ! 中華娘、お前は人の名前もろくに覚えられないほどすつかすかの脳みそをもつてんのか!？」

「ちゃんと覚えてるわよ、キャット・ウォールズ、あだ名はね・こ・ちゃ・ん。そつちこそ、人を勝手に中華娘なんて無礼な名前で呼んで、人のこと言えないでしょ!」

「生憎、必要のないものはすべて忘れる主義なんだ」
「なんですって!？」

“つららの隊長”と密かに心の中で自分たちの隊長を呼称していた隊員は、その隊長に次から次へと罵声を浴びせる少女に畏れおののき、そして少し敬服した。氷どころか冷徹かつ短気な性格が加わって、たびたび部下に鉄拳をくらわせる若き上司はまるで鋭さを兼ね備えたつららの様だと、どこか誰が言ったのだろう。それを言えば、目の前の異様な出で立ちをした少女は“炎”だった。

真っ赤なチャイナ服に体にぴったりフィットした短めのスパッツ。胸元には簡素な紐に繋がれた緑色の石が輝いている。動きやすさを追求したその服装だが、何故か背中には大きな中華鍋大のフライパンを背負っており、目立つことこの上ない。顔のつくりも決して悪くはないのだが、いかんせんその口の悪さが彼女に対する全体の評価を著しく下げているとしかいいようがなかった。

Kはギリリと部下に牽制の目を向けると、物珍しげに二人を眺めていた部下たちはビシッと直立した。そして鬱陶しげにため息を吐き、掴んでいた少女の襟をぞんざいに離す。ボタリと音を立てて地に転がった中華娘はすぐに顔をあげてKに抗議した。

「ちょっと、人身売買の一味を一網打尽にしてあげたあたしに対して、お礼のひとつもなしにこの扱って何なの!？」

「そんなことを頼んだ覚えはない。そしてお前が一網打尽にしたのは俺の部下たちだ」

「ハッ、鍛え方があまっちょろいのが悪いのよ。つまり上司の指導が悪いってこと。自分のふがいなさを人のせいにないでください。まったもって迷惑きわまりないわ」

「その減らず口を今すぐしまえ!!公務執行妨害でしょっぴくぞ
!!!」

「ああいいわよ！そっちがその気なら、あたしはアンタを婦女暴行の罪で訴えてやるから！！」

ぎゃーぎゃーと毎度おなじみの喧嘩を始めた二人の周りで、完全に蚊帳の外にされたKの部下たちがおろおろと慌てる。ディックだけは輪から少し離れたところでニヤニヤしながらたばこをふかしていたのだが、突如飛んできた回し蹴りに、ひらりと体を横にずらした。

「さすがに二度はくらわないよう、キャット」

「るっせえ、その名を口に出すな！お前もお前だディック、気づいてたんなら言えよ！」

「だってアンちゃん居た方がおもしろいし、アンちゃんが暴れてくれたらこっちもその動乱にまぎれて捕縛すればいいんだから一石二鳥じゃーん」

「コイツはただの疫病神だ、何の役にも立たん！」

「ちよつと、どついう意味よ！」

何しろ、この中華娘、Kの行く先々に出没するのだ。それも、Kが一兵士から都を守る特殊警備部隊の隊長に指名されてからのことだから、彼はこの少女を“国民の一人”として扱うしかなく、結果として場がいつも引つかきまわされるのである。今日のように、Kが計画を無視して強行突破を試みることもたびたびだ。ただ、彼女に言わせると全くの偶然らしいが。

長年、彼の部下として働いているディックにとって、上司が健やかなのは非常に喜ばしいことだ。毎日毎日額に青筋を浮かべるのが果たして健康といえるのかどうかは置いといて、彼はこの異色コンビが非常に気に入っていた。なんてったって、この喧嘩、行きつく先が見えなくておもしろすぎる。

のまま掴まれた腕を引っ張ってKを地面に引き倒す。そして自慢の商売道具兼武器のフライパンを背中に背負いなおし、ふふん、と不敵に笑った。

「まだまだ甘いよ、馬鹿猫ちゃん」

最高の捨て台詞を残し、中華娘はそのまま森の奥へと素早く消えていった。去り際に、しっかりとKの脚を踏んでいくところが抜け目ない。

るるんとスキップする中華娘を茫然と見送り、Kの部下と救出された少女たちはおそろおそろ振り向いた。しばしの間倒れたまま動かなかった彼らの上司は、ゆっくりと立ち上がる。そのおどろおどろしい形相に、部下の一人がヒツと悲痛の叫びをあげた。

ブチッ、と何かが思い切り引きちぎれる音がした。

早々と危険を察知した男は一人、たばこをふかし、君子危うきに近寄らず…と呟きながら小屋の隅へ身を隠す。

余談だが、その日、Kの部下たちは本物の鬼を見たという。

「あんの、中華娘

つつつ！！！！！！」

民の安全を守る正義のヒーローらしからぬ言葉を叫び、ふつつつと煮えたぎる怒りを爆発させたKは、事後処理もそこそこに、一人の少女の後を猛然と追いかけるのであった。

X X X

そしてその数日後。子供を誘拐し、多額の身代金を要求した悪党の前に奇妙な中華娘が現れ、その後やってきた警備部隊の短気な隊長とひと悶着あったのは、言うまでもない。

．．．T o b e c o n t i n u e d ?

(後書き)

K : 本名で呼ばれるのが嫌い。超短気。すぐ鉄拳が飛んでくるので隊員たちは彼をかなり恐れているが、それ以上に尊敬している。

アン : 中華娘。異様な格好で偶然(あくまで偶然) Kの関わる任務に出くわしては引っかきまわすだけ引っかきまわして逃走するので、Kはイライラを募らせている。正義感がかなり強い。ただしほぼ100%空回る。

ディック : 超ニコチン中毒者。人生をのらりくらりと生きていくうなぎみたいな男(K談)。たばこがない世界は滅びるしかない。と半ば本気で思っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2847u/>

中華娘にご用心

2011年10月8日06時15分発行